

あとがき——SSR 研究の課題

本報告書における 10 の論文と 7 つのコラムを通して、執筆者全員が SSR における「安全保障と開発の交錯」という概念を、紛争（後）社会の現実に対する有効な分析枠組みとして受容し、またそれを克服するための方策を探るという問題意識を共有していることが明らかとなった。より短期的な課題としては、SSR に関与する多様な行為主体が、分野横断的に行わなくてはならない対話の厚みと場の数が、まだまだ不足していることが挙げられるだろう。とりわけ SSR の実務に携わる人々が意見を公にし、情報をフィードバックする場が今後ますます必要となってくるだろう。研究者間でも、司法・行政・警察の分野と平和構築論の間の学際的対話はまだ少ない。また、「安全保障コミュニティ」と「開発コミュニティ」という分類は現実を見通すうえで非常に便利で有効な理念型ではあるが、現実にはそれぞれのコミュニティの中に多様なアクターが包含されており、後者の前者に対する見方が一様ではないことは、民軍関係の研究においても示されている。現場と理論の間の往復運動をもっと積み上げていくことで、SSR 研究はより生産的な分析枠組みを提供できるだろう。その点で本報告書は、議論の一つのたたき台としての意味を持つ。

他方で、篠田英朗が述べているように、SSR が「平和構築の基本事項として自明視されればされるほど、あるいは SSR が実施されたという事例が増えれば増えるほど、なぜ SSR が求められるのかについての検討は、かえって不必要に見えてくる」ということも起こり得る。現実の後追的研究のみでは、実務家はアカデミックな議論の必要性を認識できなくなってしまいうだろう。したがって、SSR を研究する人々にとってのより長期的な課題としては、冷戦終結後に出現した「新しい戦争」に向き合う新しい国際社会というより大きな歴史的流れの中で、SSR の意義付けを行うことだと言えるのではないだろうか。例えば 80～90 年代に「国家の衰退（退場）」が喧しく唱えられた時期があったが、実際には国家が衰退したのではなく、国家が持つ主権の意味内容が変化を遂げたのだという議論が今ではより説得力を持つようになっている。そして平和構築活動においては、その意味が変わった新しい国家主権概念に基づいて、権力の国家への一元化をめざす活動が現実展開されている。SSR が平和構築活動の中で不可欠の要素として認められていることの背景には、こうした国際関係のダイナミクスが存在する。SSR 研究者にできることは、そうした国際関係の通時的・共時的な分析を通して、より広範な見取り図を現場に提供することではないか。そのように考えた時、SSR 研究はいま最も刺激的な研究分野の一つであると言い得るのではないだろうか。

長谷川 晋